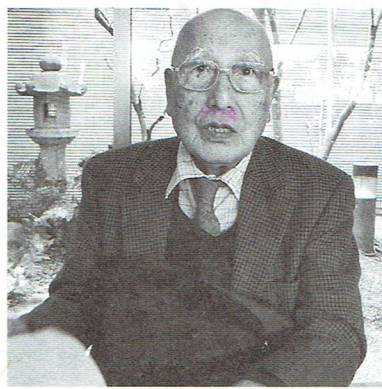


# 和紙 だより

## 目次

越前和紙への提言 河野徳吉さん	1
工房探訪 野田版画工房	2
漉き場探訪 (株)滝製紙所	3
和紙ミコナー 情報欄	4

## 越前和紙への提言



■河野 徳吉(こうの とくよし)  
1926年、東京赤坂生まれ。文学博士、和紙流通史研究者。1953年慶應義塾大学文学部卒業後、日本電電公社総裁室、野村総研情報管理室長を経て、1983年より東横学園女子短期大学教授(現 東京都立大学名誉教授)。現国際医学情報センター評議員、東京国立博物館客員研究員、紙の博物館評議員。和紙に関する著書多数。主編著「紙漉平三郎手記」(1960)、「飛騨中山紙」(2004)、「尾張藩紙漉文化史」(2005)、「奉書紙の版元・商人史」(2016)。紙の博物館機関誌「百万塔」にて「京都の紙」を連載中。

## 河野徳吉さん(和紙流通史研究) 「紙の流通の基本は信用」

### ●和紙研究のきっかけ

和紙に関わるようになった契機は、昭和五十年頃、吉川弘文館から刊行された「国史大辞典」に掲載する「日本の和紙」の編纂協力依頼があった時です。この辞典は日本最大級の歴史百科事典で、和紙の項目の執筆陣は寿岳文章氏をはじめ数人の研究者に依頼し、辞典に掲げる項目、字数、図録、形式等の統一については予め決めてありました。

五年で完了するとあり、後半の一部分の執筆を受け持ちました。紙の種類、原料の呼び名は地方によって異なり、現地調査や古文書の分析植物学の調査分析、相互の照らし合わせの工夫も必要でした。石州の紙を現地調査に行った時、紙漉の職人が話す言葉が石見弁で分からなかったため、一つ一つノートに書き留め、帰ってから島根県各郡の方言を調べ、更に紙漉の言葉を歴史考証していきました。

### ●洛中の紙

平安時代、和紙が本格的に日本の社会の中に浸透して来ました。奈良時代に活動を開始した「紙屋院」(かみやいん)は、律令制度によって、宮廷を始め諸政庁の料紙を漉き、かつ写経事業に協力、神龜五年(七二八)には国産原料を用いて紙を供給平安から室町時代に至るまで機能を果たしました。平安初期、京都北部の鷹ヶ峰を水源とし、時代によって多くの別名(荒見川、有栖河、仁和川、天神川など)を持つ「紙屋川」のほとりに、図書寮直轄の紙屋院が作られ、宮廷で用い

### る繪旨紙(りんじし)、曆紙、幣紙など、多様な料紙を抄造します。白い紙ばかりでなく、還魂紙(かみごんし)、宿紙(すくし)と呼べれた薄黒い漉き返しの紙も、用途上は差し支えないので、宮廷内の日常文書類に使われました。

室町時代になると、宮廷、平安時代の紙屋：壁に紙を張り乾かす様子  
各省庁の古く(出典「洛中洛外図屏風」上杉本)



平安時代の紙屋：壁に紙を張り乾かす様子  
(出典「洛中洛外図屏風」上杉本)

なつた料紙は、座の支配権を委任された図書寮御用達の指定の紙業者梅井家、小佐治家)によって扱われます。この両家は税制上も優遇され、宿紙座の支配、紙屋川の水路や紙漉場の経営権も持つようになり、紙屋院の機能は徐々に弱体化していきます。室町後半から安土桃山時代になると、美濃、越前、播磨、備前、美作の紙などが、いい原料で良質な料紙を抄造し、洛中の商取引に台頭してくるのです。京都中心部の高辻・西洞院交差点辺りには、江戸時代、紙座があったが、近江の紙商が大量の美濃紙を安価に仕入れ、寺の市で売るため、迷惑至極、経済的に追い込まれていると、美濃紙流入差し止めを願っています。

### ●宿紙の村

十世紀の中頃から文芸を重視する動きが始まり、勅撰和歌集を編纂するための「和歌所」(大歌所)が、内裏西北に作られます。この頃から洛中で消費する新しい紙は、全国の国府領、寺領、荘園主を通して運ばれ、洛中の紙取扱商の手で、市場に届けられます。平安期に花開いた文芸、「宇津保物語」「枕草子」「紫式部日記」「源氏物語」等を調べると、薄様、厚様、色紙、陸奥紙、懐紙、唐紙、畳紙、継紙、真弓紙、香を染み込ませた紙など、実に様々な紙の名が登場し、どういう時に、どういう心情で、どういう紙を、どういう色合わせや包み方、結び方で使ったのかが分かります。

室町時代、応仁の乱で紙屋川畔は、ほぼ壊滅状態。足利義満はこの洛西の地を再生しようとして、川畔に紙漉郷を設け、洛中で回収した古紙を漉き返す地としました。こうして宿紙村が誕生し、紙屋川の宿紙は、盆暮の贈答品や土産物として人気を博しました。紙の種類も豊富で、御所用の料(紙屑買(元禄3年1690))紙から、庶民が使う鼠色の落とし紙まで、辻々の小間物屋で入手できる生活用品となりました。古代から実に昭和





### ■野田版画工房

空間を彩る抽象絵画のような唐紙

滋賀県東部、紅葉で有名な永源寺に近い東近江市の山間部に、野田拓真さん、藍子さんの「野田版画工房」を訪ねた。築三十六年という古民家風の家の入り口には、拓真さんの父の手による麻生地に染め抜かれた大きな暖簾がかかる。拓真さんのご両親は染色作家で、すぐ近くの集落の古民家で、二十三年前から「風野工房 燕来庵」という工房兼ギャラリーを営み、暮らしている。そういう影響もあつてか、拓真さんご夫婦は自然豊かなこの地で、オリジナルの唐紙を制作し、襖、屏風、パネル、壁紙などに仕立てる仕事を行っている。



できるというのが、自分が思い描いていた仕事の理想形に近かった。」

早速、見習い期間を経て、丸五年間を「唐長」で修行することとなった。技術の習得は経験を重ねるしかない。版



木の扱い、色の調合、糊の量や粘性の調整、紙の状態と発色の関係など、四季折々の気候を感じながら、材料に触れ、覚えていった。又、接客仕事で学ぶ事も多かった。実際に設置する空間の光環境や広さによつて、同じ柄でも色合いや色の載り具合が違つて見えるので、それを見越して絵の具や具引色を微妙に調整するスキルも必要なのだ。

「唐紙は空間の中でうるさくなつてはいけなと言われました。ある時、自分としてはとても良く摺れたと思つた紙を見てもらつたら、『キレイ過ぎや』と言われたのです。キレイ過ぎというのは、結局手摺りの良さが無いという事で、絵の具の量や紙の湿し加減、多少の絵の具のムラなど、唐紙らしい表情の出し方を考えなくてはならないというのです。要するに、シルク印刷みたいに見えるのはダメなのです。」と、拓真さんは当時を振り返る。

### ● 作風

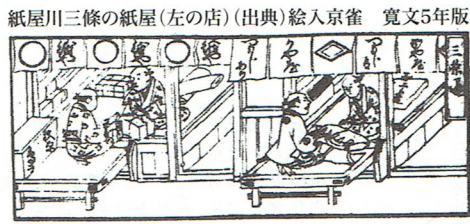
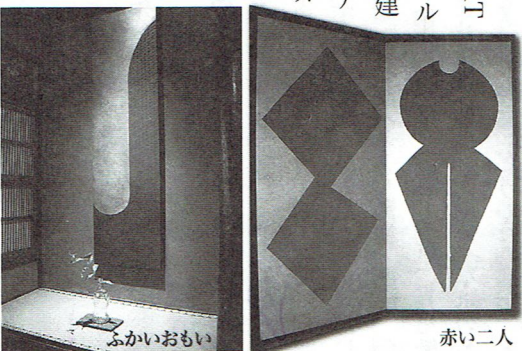
唐紙のパターンデザインは藍子さんの担当。今までデザインしたオリジナル柄は、数十種類。「森」「るるる」「ひらひら」となどの暮らしぶりやイメージさせる詩的な名前が付けてある。襖や屏風の制作は、二十畳ほどの作業部屋で、拓真さんが行う。色塗り面積の広い図柄は型

を作り、取えてムラのある具引を施す。一色に見える箇所にも繊細な色の濃淡が見える。マチエールを表現したいのだという。あたかも抽象絵画を思わせる襖や屏風作品には、「ことばのはかり」「赤い二人」「ふかいおもい」「母に抱かれる」など、これ又アートなタイトルが付けられている。

「現在、住宅や店舗など、襖や壁紙を白やベージュ系統でまとめるプレーンなスタイルが多いように思うのですが、僕はそこに心にグツとくる色を挿していきたくる色を挿しているのです。いつか特注で作るのですから、空間をガラツと変え、驚きと感動が伝わるようなものを提案していきたい。」と拓真さんは言う。確かに、作品には「華」がある。

### ● 材料

「CONFORT (コンフォルト)」という建築インテリア雑誌に紹介されて、にわかにな建築士やインテリアアコターからの注文が増



### ● 研究態度

紙の流通史研究は、古文書解説が欠かせません。国会図書館には足繁く通つていますが、根気よく史料を当たるとともに、実際に現地に行つて調べることも重要です。時には、地方の教育委員会や古文書収蔵の部署を訪ね、郷土史家にも同行や交流をお願いすることがあります。「紙漉平三郎手記」の時も越前に三年間通いました。流通で一番大切なことは「信用」です。人々は物や情報・人のネットワークを信用し、売買するのです。イメージネーションを働かせて、その時代の人々の営みを想像すると、研究方針も固まってきます。調査したことや夜中に思いついたことは自分の研究ノートに記し、何十年分もとつてあります。デジタル時代の今日ですが、昔調べたことも案外こういう方式がすぐに取り出せ、役に立つのです。

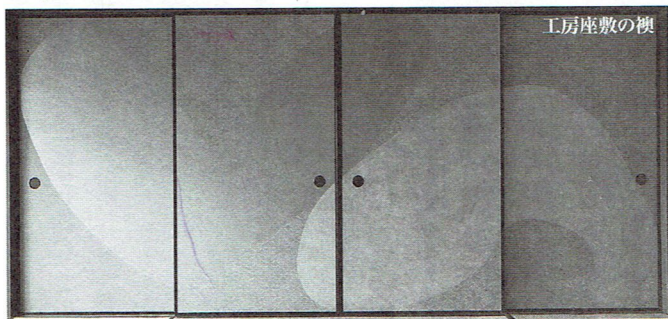


えてきた。関東圏からの問い合わせも多く、インバウンド需要で活気付く京都のゲストハウス、旅館、レストラン、店舗の仕事も増えた。一般のお客様は、ウェブサイトやSNSなどを通じて当工房を知るようだ。

使う和紙は絵の具が滲まないようにサイジング加工を施してもらう。越前の特漉きや徳島の阿波紙など用途により使い分ける。顔料は胡粉や雲母など天然物を中心に、群青や黄土、パールなどは合成系のものも使っているが、どれも水に溶けやすく変色しにくいものを選んでる。糊は接着力の強いでんぷん糊や膠を使う。襖の引き手金具は、東京の金物作家からも取り寄せている。シンプルで素材感がよく、作品によく合うのだと言う。使いやすいものであれば、伝統素材にこだわらず、新しいものも積極的に使うのが信条だ。

「たまに、コラボして何か作りませんか、と言うようなお話

もありますが今の所は、よほどの事が無い限りお断りしています。まずは自分達が主体的に楽しんで、ワクワクドキドキできる仕事でないといけないし、お客様にもそれらきつと伝わると思うのです。」とお二人は語ってくれた。



■(株)滝製紙所  
「産地の横のつながりを生かす」

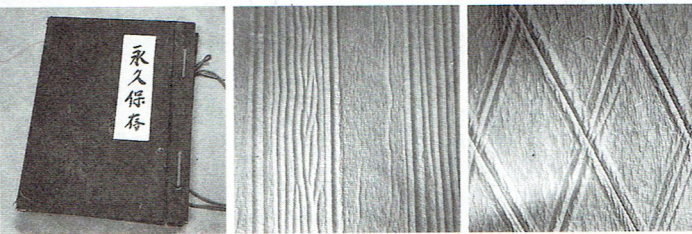
明治八年(一八七五)創業の(株)滝製紙所は、襖紙を始め、襖版檀紙や創作和紙、機械抄き鳥の子紙、模様紙、美術小間紙などを製造している。越前市大滝地区の工房で、取締役の瀧英晃さんにお話を伺う。

●残したい大判の手漉き檀紙の技術

業界では「大紙屋」と呼ばれる、襖判の檀紙を製作しているのは、全国で唯一、滝製紙所だけ。檀紙は厚手で繭のような光沢を持ち、凹凸の雛(シボ)がある格式のある高級紙だ。

昭和二年の同社の紙見本帳には、七種類の檀紙の模様が載っているが、住宅の洋風化による襖需要の落ち込みや、高級紙とあって、注文はそう多くはない。「小紋り」や「菱紋り」は四年に一回ほどの頻度で作ってきたが、最近、ある旧家の修復に際して

注文があり、三、四十年ぶりで「竹編紋り」という檀紙を作った。会社には、目盛りの付いた当て木や定規を数種類取っているが、それが竹編紋りのものかわからないので、まず道具探し



右菱紋り 左竹編紋り

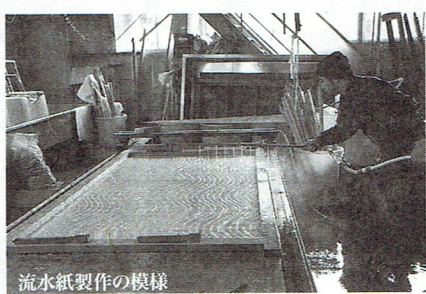
から始めたという。絞付け作業は父の隆一さんの記憶を頼りに二人がかりで行った。

襖判檀紙は真夏の時期にしか作れない。和紙全体を急激に乾燥させるように、部屋を締め切り、サウナのようなムロ状態にして、均一に自然乾燥させる。紙床(しと)に重ねた湿紙を数枚ずつ重ねて板に張り、当て木を当て、紙を徐々に折り引きはがすことにより、シボ模様を作る。板に張った紙は、寝かせたまま平置きで乾燥させた後、再び水を振った湿紙の四辺を釘で打ち付け、今度は蒸気に当てて平滑な紙にする。楮一俵で、三六版約四十枚ができる。

「注文がないと、こういった伝統技術も作り方を忘れてしまうので、作る機会を意識的に作って、継承できるようにしなければなりません。今回は社長が声をかけて、他の紙屋さんにも見ていただきまし、紙の博物館の方が製法をフィルムに撮って下さいました。」

●創作紙に活路

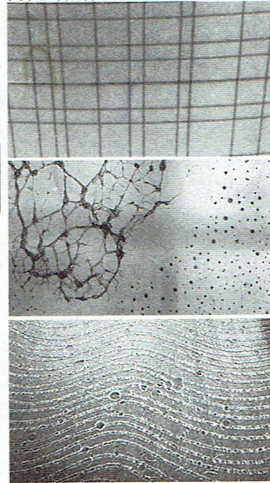
襖紙に代わって、最近は大判の創作和紙で活路を見出そうとしている。以前は、一点物としての創作和紙を漉いたりしていたが、それが次第にイン



流水紙製作の模様

テリア・内装材の定番商品としてカタログに載るようになってきた。流水や落水模様のプレーンな和紙は、壁紙やスクリーンに使われ、外資系のホテルなどに採用されるもケースが多い。大判和紙が漉けるメリットを生かして、主張しすぎず、和のテイストを残しながらも、

内装用創作和紙



社長の瀧隆一さんと英晃さん

モダンな紙が今後の方角性ではないかと、英晃さんは分析している。父の隆一さんは三十年ほど前、越前の仲間とデザイナーで紙製品を考える「オオタキペーパーランド」というグループで活動していた。多色刷りの軽い紙質の「メレンゲ」も当時の開発商品だ。

「伝統産業はとかく閉鎖的で、秘密主義と言われますが、僕らはちよつと分らないことがあると他の漉き場に聞きに行く。それらが産地の底上げになっていると思います。この横のつながりは、父の世代がオープンマインドな動き方のできる空気を作ってくれたお陰です。それが僕らの世代に受け継がれている。それにみんな大滝神社の氏子やし…」

●若手の動き

英晃さんは、越前の紙漉きの後継者で構成される「越前和紙青年部会」の長もこれまで二回やった。年一回共同で行うカレン



シンプルな朱印帳は好評



ダー渡ぎを通して、越前の技法を勉強し合い、技術の伝承と発展を考えるのが目的だ。この活動に加え、最近では、市場やエンドユーザー理解のための作品や商品の展示など、新しい動き方にも挑戦してきた。

「二期、展示会がものすごく流行った時があつて、いろんな場所に出展しました。その都度、経費も結構かかりますし、どこことなく他のやり方があるのではと感じたのも事実です。問題は『どこどこ』の展示会に出ました』ではなく、その後の動きの方で、具体的な戦略作りや重点政策などがあまり見えなかった。」

昨年十二月開催の、いわば「行く」のではなく「来てくれる」体験型マーケット「RENEW」、福井クラフトツーリズムへの参加も青年部が主導した。こちらは手応えもあり、気付かされたことも多かった。例えば、「和紙に色が付けられる事を知らなかった」「ザラザラした方が裏だとは知らなかった」や、ある雑貨店の店主は「和紙は店内で広い面積を取る割には安い。高くていいから値打ちのある小物を作つて欲しい」などの意見が聞けた。

英晃さんは「ネットの使いこなしも大変重要で、日々の新しい情報は、SNS系のインスタグラムとフェイスブック、じっくり産地の情報を知りたい場合はウェブサイトで、という具合に使い分けなければいけない。最近の若い人はま



同社の昔の商標を元に新しいロゴマークを作った。鷹と楯と三楯のデザイン。

ず画像検索をするので、写真の質やデザインも目に留まるものでないと見てもらえない。」と語った。

## 「紙博in京都」… PAPER EXPO 京都でも開催

去る十二月二三日、京都市岡崎の「勸業館みやこめつせ」で、「紙博三京都」が開催された。素材・雑貨・作品としての紙などを、全国から洋紙



和紙、雑貨、印刷、紙加工、文具、箱屋、民芸玩具メーカー、約六十社が出展。二〇一七年四月、東京浅草での第一回目に続き、今回で二回目の開催となる。企画したのは、東京都調布市に拠点を置く編集チーム「手紙社」。イベント企画、書籍の企画編集、飲食店・小売店の運営を柱に、自分たちが面白いと感じるもの・ことを提供している。手作りファンに人気の「布博」を企画しているのも同社だ。

和紙関係では、アワガミファクトリー、ハタノワタル(黒谷和紙作家)、和紙田大學(大阪の和紙問屋)、古川紙工(美濃の紙加工)、シーング(美濃の紙加工)が素紙、文具、カード・パーティー用品、紙遊びの品々を出品した他、テキスタイルデザイナーの型押し和紙グッズや自作模様を印刷した和紙で作る箱専門の作家作品もあつた。会場

には若い女性を中心に、二日間、延べ六二〇〇人が来場し、トークやワークショップ等も楽しんだ。



## 情報欄

### ● イベント情報

#### ■ 越前和紙展「技を極める」

～越前和紙が創り出す装飾紙の世界～

時：平成30年2月12日(月)～2月17日(土)

場所：東京日本橋「小津ギャラリー」

内容：展示

ギャラリートーク(2月17日 14:50～16:40)

越前鳥の子紙について

越前鳥の子紙保存会 会長 柳瀬 晴夫氏

墨流し体験

2月16日・17日 10:30～15:00

福井県無形文化財技術保持者 福田忠雄氏

#### ■ 第85回東京インターナショナルギフトショー

時：平成30年1月31日(水)～2月3日(土)

場所：東京ビックサイト 東3ホール

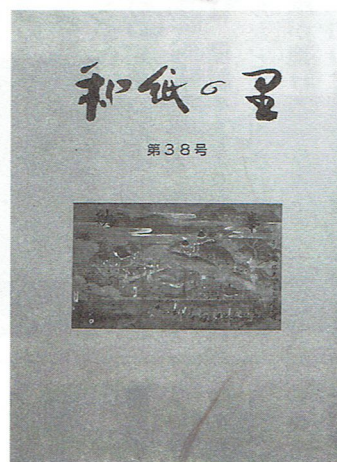
#### ● 「和紙の里」第38号発行(越前和紙を愛する会)

今春、紙祖神岡太神社・大瀧神社は1300年大祭を迎えます。その折に執り行われる神事や古文書記録などが解説されています。

内容；重要無形文化財となった「越前鳥の子紙」と保存会の経過報告、五箇の文化財調査の課題(村田健一)、慶応二年の「法華八講記」について(小林博之)、岩本村 内田吉左衛門家の江戸中期商いの形態について(岩原正吉)、小林家文書に見る岩本村(五箇歴史研究塾)など、

お問合せ：越前和紙を愛する会

TEL :0778-43-0875



#### 編集後記

鎌倉幕府の公用紙と言えば「杉原紙」が頭に浮かぶが、河野徳吉先生によると、鎌倉でも「鎌倉紙」を漉いていた痕跡があるという。折形礼法「包結記」を表した伊勢貞丈の「貞丈雑記」には、「武家の御下文紙と申は、今様鎌倉紙なり、杉原にはあらず(中略)鎌倉にて漉きたるなるべし…」とあり、幕府が残した諸記録も調べてみると、鎌倉独自の幕府公用紙が梶原山の西側で抄造されていたという。現在、鎌倉市梶原中央公園辺りでその痕跡を見ることができると伺ったので、一度訪れてみたいと思う。(よ)